# 「南洲翁遺訓」について

第二話

**第八条　維新後の安易な西洋文明導入への警鐘**

**第十二条　闇雲な西洋批判ではなく、西洋の長所（例:刑法）は取り入れようとする西郷の柔軟性**

明治１０年反政府軍の汚名を着せられ転戦している最中、突如夜空にひときは大きく輝く星が現われた。人々はそれを指さし、**西郷星**と言った。

それから間もなく、西郷が城山の露と消えた。市井の人々は「天よりこの国を見守るであろう」と西郷への思慕をかき立てた。以後西郷は近代日本の思想家たちが、近代の意味や是非を問う時、現在でも必ず参照にされる**『輝く大きな星』**である。現在まで多くの西郷隆盛を描いた著書が出版されている。これは自らの思想を鍛える時に思いを託す人物となっている故であり、そこに西郷隆盛伝説が生まれたのである。

鹿児島市城山町に建てられた「南洲翁終焉の地」の石碑

西南戦争直後、西郷へ浴びせられる連日の新聞の批判に、福沢諭吉は「丁丑口論（ていちゅうこうろん）を書き、反論し、「東洋のルソー」として有名な中江兆民（なかえちょうみん）も西郷を評価し、伊藤博文の明治政府を疑問視した。

兆民の高い評価を受けた頭山満（とうやまみつる）は「萩の乱」への呼応を企て投獄されていた結果、西南戦争で西郷軍へ従軍できなかった事に悔やみきれず、自由民権運動に参加しながら鹿児島を訪れ、西郷を偲んだ。

注）萩の乱
1876 年（明治 9 年）に山口県の萩で起こった明治政府に対する士族反乱の一つ。1876 年 10 月 24 日に熊本県で起こった神風連の乱と、同年 10 月 27 日に福岡県で起こった秋月の乱に呼応し、山口県士族の前原一誠（元参議）、奥平謙輔ら約 200 名によって起こされた反乱。

西南戦争の際、西郷の周囲には私学校の士族だけが居たのではない。例えばルソーの「社会契約論」を抄訳した中江兆民の「民約論」に詳しい自由民権運動家であった宮崎八郎は協同体を組織して参戦（戦死）し、西郷の弟分で岩倉使節団の一員として米欧視察に参加し、大久保達から将来の首相と目された洋学知識人である村田新八陸軍中将は英語も練達で西洋事情にも明るく、西洋を非常に良く理解し西郷の立場をよく知ったうえで政府の職を辞し、西郷と運命を共にした。また村田新八に共鳴する「熊本学校党」の池辺吉十郎（いけべきちじゅうろう）率いる熊本隊が加わり、宮崎からは６年半も米国留学経験をもつ島津啓次郎ら 1,300 名が参加する等、士族だけでなく、当時としては最先端の近代的な思想の洗礼を受けた人達も西郷を慕って命を預けたのである。彼等は西洋化の猿真似の如き風潮に、国家の未来に対し本能的危機意識や不平等条約の批判、少数による権力独占の「有司専制」の現状を変えるきっかけとして西郷の「決起」に期待を寄せたのであろうか？

驚くことに、文芸評論家江藤淳（えとうじゅん）は政治家として一度も失敗しなかった海舟（かいしゅう）が政治家として大失敗者ともいうべき西郷南洲を却って追慕して止まなかったのは、どういう訳か？　ひょっとすると海舟も失敗したかったのか？　それなら西郷の思想とは何か!!　と「南洲残影」で述べている。

西郷の基本的な政治綱領（こうりょう）は日本・朝鮮・中国・インド等のアジアが一体となり、統一・協同して西洋に対処し、人類の本当の文明を再生する。その為には学問も統一されるべきで、大自然の真実・法則をそのまま把握し認識するものでなければならない。……というものであろう！

さて時代を前に戻すと、先ず西郷は、西洋列強の脅威によって揺らぎ続け、激

動する幕末維新の日本が、多くの破壊と多くの犠牲によって成し得た近代国家、そして自らも最大の事業である廃藩置県や山県有朋と共に武士の立場を否定する如き国民皆兵制度である徴兵制度の導入の断行という、中央集権体制に一気に移行させた。

まさに革命的とも称せられる政治体制の近代化を主導したのが西郷だったのだ。しかし時代が望んだ近代化も岩倉・大久保・伊藤・木戸たちの思想と西郷の日本の進むべき道の思いは明治６年の征韓論からその軌道は次第に反れていく。当時の朝鮮王室は「日本近代化を『西洋の奴隷』になった国」と見ており、国交を断絶し、交渉など問題外と決めていた。その事実を知っている人は少ない。

「征韓論」＝「朝鮮侵攻」と誤解している人もまだ多い。西郷はこの事実を知った上で、西郷は西洋列強の野蛮性を喰い止める為に、「朝鮮の開国を促し、アジア防衛について肚を割って話し合う為に**遣韓使節**として、自らが命をかけて朝鮮に赴く」と提案したが、岩倉や大久保・木戸は反対した。それは朝鮮の内情が良く理解できなかった事と西郷の生命を守ろうとしたからだ。それに日本に関わる西洋列強としては新政府を操りたい思惑（しわく）から「西郷は思想的に要注意人物だった」ので**遣韓使節**としての渡韓は大反対であった、故に岩倉・大久保等に「反対の圧力」を及ぼしたことは想像に難くない。

西郷が征韓論以後、岩倉・大久保等と袂（たもと）を別つ要因になったのは、簡単に述べれば「西郷は政教政治」を主張し、岩倉・大久保等は政治に道徳を要求されるのは困るとの言い分だ。特に大久保は、日本の世界に於ける立ち位置から大きな危険を感じ、大衆の意見を政治の場で聞く余裕など無い。今の日本に必要なものは、必ずやらねばならぬ。すぐやらねば危ない、故に権力独占でもある『有司専制』を行ったのである。これは時期が移れば是正可能である。しかし政治に必要な根本理念が西郷と大久保等との間に大きな乖離（かいり）があった。それは西洋をどう観るかである。即ち近代文明に関する意見の相違でもある。

岩倉・大久保は近代国家と称される西洋近代国家に対し、西洋思想に対し無防備過ぎたのではなかったか？　極端な話だが、当時の知識人たちの中には明治維新の役人達は一人残らず売国奴である。日本を西洋帝国主義に魂を売り渡し、その代償として私利私欲を満たしただけの陋劣（ろうれつ）きわまりないペテン師の一味……と信じ、当時の政府を信用せず、日清戦争に勝利した時、やっと政府を信じ日本が一ツに団結できた……との説を持つ人も居る。

司馬遼太郎は「戊辰戦争後の西郷は、腑抜けになった」と評した。西洋帝国主義の手先・売国奴・西洋かぶれだと、日本知識人の代表の一人として西郷を見下した。しかし西郷は一時期、一見虚無的に見えたかも知れないが、決して腑抜けになってはいない。西郷は戊辰戦争や西洋思想に対しての深い深い民族的反省の行に早くから入っていたのである。

次の逸話は二人の根本理念を明確に表している。そして我々に多くのことを考えさせてくれる。西郷が西洋の文明とは「まともな文明とは言えず」西洋は**野蛮**だと言い放ったのに対し、この議論を吹きかけた大久保は「西洋文明は決して野蛮などではない」と反論したが、結局何も言えなくなって口を閉じざるを得なかった。西郷は当時の西洋帝国主義の正体を適確に見抜いていたのだ。

西洋の野蛮さを描いた当時の絵画

西洋に対して基本的な視点を西郷は冷静に確立していたので、もし西郷が生きて日本の指導者となっておれば「西洋の正体」をより深く追求し、日本国家の組織を改変したはずだ。即ち日本及び東洋が、西洋に的確に対処し、防衛自衛できるように日本の国家制度や政治・文化を再組織する方向に行動できたであろう。江藤淳は「西郷は今迄日本になかった思想である」と著書に述べている。江藤淳は又、第一話でも述べた如く、日本人は「西郷南洲」以上に強力な思想を持ったことはない、そして日本は西洋に対する戦い（武力以外の戦い）に於いて、西郷の遺志ゆえに続けるべきだと主張して止まない。

注）江藤 淳
戦後日本の著名な文芸評論家で、小林秀雄の死後は文芸批評の第一人者とも評された。明治国家を理想とする正統的な保守派の論客として論壇で異彩を放つようになり、しばしば戦後保守派や新保守主義派の論客とは対立した。プリンストン大学への留学を通じて得た米国での経験から、巨大なアメリカ社会とどう向き合うかというテーマに生涯取り組み、戦後日本における西欧模倣の近代化を他の言論人に先駆けて鋭く批判した。

江藤 淳

しかし日本は西洋思想の真似をして、西洋に追いつけ追い越せと、西洋を鏡として努力を重ね、国家を発展させ、アジア地域を西洋列強から解放する為に戦い、大きな犠牲も払った。その後世界は真の平和を得たのだろうか？理想郷に近づいただろうか？

世界は現在、西洋思想による産業国家主義や専制主義、覇道主義と逆の方向に歩んでおり、地球の自然生態系そのものが完全に瓦解（がかい）に向かっている。日本も西洋化し、中国も中共による西洋化の独裁国家となり、インドは独自の路線を提起中というように推移している。日本・中国・インドが統一協調し、今迄とは別の形の文明を再興させなければ、世界は危うい。西郷のような別な視点が必要だろう。

小生は思うに、西洋近代思想というものが「人間を中心に、宇宙が存在する」

が如き、狂気と妄想の西欧の「思想の罠」に嵌（はま）ってるとの感覚が各自に無ければ、西郷が「西欧思想に溺れゆく近代日本」に危機と失望を抱いた心中は理解できまい。この様な日本の将来の運命とか、成り行きや展望を直観的に見ていたのは孝明天皇であり、西郷であった。故に西郷は岩倉・木戸・大久保一派と完全に決裂したのだ。

何故、西郷は西洋文明を「野蛮」だといったのか？誰よりも西洋の正体を深く透察していたであろう西郷は、当時日本をどう見ていたのであろうか？　西郷の政治観・道徳観・文化観、特に死生観をこの遺訓の中から察し、南洲翁の奥深い思想から多くの示唆を感じ取ってみたい。まず遺訓の八条から西郷の日本観を窺（うかがっ）てみたい。

（原文の引用から）
「広く各国の制度を採（と）り開明に進まんと、ならば、先（ま）ず我が国の本体を据（す）ゑ、風教を張り、然（しか）して後、徐（しず）かに彼の長所を斟酌（しんしゃく）するものぞ。否（しか）らずして猥（みだ）りに彼に倣（なら）ひなば、国体は衰頽（すいたい）し、風教は萎靡（いび）して匡救（きょうきゅう）す可（べ）からず、終（つい）に彼の制を受くるに至らんとす。」

南洲翁の炯眼（けいがん）と憂いは、今日の現状に照らしても、一大警告となるべき遺訓であろう。政治家も政党も教育者や学者も指導者もマスコミのジャーナリストも、国家存亡の岐路として深く心に刻むべきだ。訳としては、広く先進国の制度を採用して日本の近代化を進めるには、まず大切なことを守らねばならない。それは先ず「国家の本体を基礎におく」ことだ。

その上で歴史や伝統を尊重し、更に徳をもって支えることが我が国の政治の根本である。それらを守り確立させた上で、我が国家にとって「何が必要で、何を受け入れるべきでない」との価値判断の「ものさし」が必要であり、大切なことである。また、どの順番でどこから採用すべきかの「序列化」を定めなければ、多数の選択肢を前にしてパニックに陥るであろう。

西洋の言うままに何の考えも無く唯々諾々（いいだくだく）と従うならば「彼の制を受くる」、即ち「国ごと外国に支配」されてしまう。だからこそ第一に「日本とは何か」という問いが必要だと強調している。現在もみだりに外国のマネをし、国柄が薄くなっている状況も多々見られることは残念である。

西郷は前八条に述べているように、西洋を正確に判断し、決して「神風連（じんぷうれん）」式の如く闇雲な反西洋ではなかった。実際西郷は具体的な制度では西洋文明を称賛し、長所を認めている。それは遺訓１２条にて証明されている。

西洋の刑法は専（もっぱ）ら懲戒を主として過酷（かこく）を戒（いまし）め、人を善良に導くに注意深し。故に囚獄中の罪人をも、如何にも緩（ゆる）やかにして鑑戒（かんかい）となるべき書籍を与え、事に由りては親族朋友の面会をも許すと聞けり。尤（もっと）も聖人の刑を設けられしも、忠考仁愛の心より鰥寡孤独（こんかこどく）を愍（あわれ）、人の罪に陥るを恤（うれ）ひ給（たま）ひしは深けれども、実地手の届きたる今の西洋の如く有りしにや、書籍の上には見え渡らず、実に文明ぢゃと感ずる也。

西郷は驚くことに、すでに具体的な西洋の刑法を理解していた。西洋も以前は拷問等冷酷悲惨な司法に関する歴史は長いが、近代化によって、罪人に対し罰を与えるのではなく、善良に導くことを主眼とした。日本は、明治維新後に於いても新政府の大久保は新政府の司法卿・参議まで務めた江藤新平を、佐賀の乱を起こした際には首を切り落とし、晒し首にした。西郷を司馬は青写真を持たない古色蒼然とした人物と見ているようだが、西郷よりむしろ明治新政府の側の方が古色蒼然とした対応を罪人に対して行っている。訳としては「西洋の刑法は見せしめや制裁ではなく、犯罪人に罪の重さを悟らせ、善良に導くことに主眼を置き、刑を苛酷にならぬよう注意を払っている。獄中の罪人に対しても、あまり人間性を無視した如き拘束を慎み、教戒となるような書籍を与え、場合によっては親族や友人達にも面会を許すと聞いている。もっとも本来、古代支那の聖人達が刑を設（もう）けられたのも、忠考仁愛の心を持って、社会的に不安定な弱者、即ち妻を亡くした男、夫を亡くした妻、親のない子、独り者等を憐れに思われて、そういう環境のせいで人が罪を犯すことにならぬよう心配されたからだそうだ。

けれども、それは実際にどうであったかは、今の西洋のように手の行き届いたものであったかは……その事については記録に何も残っていない。この点については、西洋は実に「文明」であろう……と感心している。

西郷の尊敬した橋本佐内は安政の大獄で亡くなる前、獄中で「獄制論」を著して、我が国の「獄制」が「悪さをした者をさらに悪い人間にさせるような制度」である、と批判している。江戸時代の獄中生活というのは、いまからは想像も出来ないほど悲惨なものであったようだ。そのことを誰よりも痛感していたのは西郷であろう。二度も島流しにされて、沖永良部島では死に近い状態になった。

幕末の志士の藤田東湖も吉田松陰も橋本佐内も自宅謹慎とか投獄とかを経験した人が少なくない。西郷の弟、従道（つぐみち）は明治２年から３年にかけてヨーロッパを視察し、帰国してからは警察制度の確立に尽力しているのも偶然ではあるまい。遺訓の中で「西洋」を積極的に褒めているのはこの箇所だけである。沖永良部島での獄中生活の厳しさは、さすがの西郷もよほど堪（こた）えたものとみえる。

　では、西洋文明を受け入れる際の「ものさし」とは如何にすれば得られるのか？は、その一例が「遺訓」の第二条の文章に出ている。

次に続く。

平成３０年９月２３日

志雲会代表　有　馬　正　能